

『開かずの窓』

星日ト奏

あらすじ

フリーランスのフォトグラファー青木なみの暮らすマンションの管理人、滝川はいつも周辺をキレイに保ってくれている。ある日、ふとしたきっかけで会話すると、実は滝川もかつて写真を撮っていたという。後日、自身の作品を手渡したなみに、滝川が粋なお礼をする。

8階建てのマンションの、6階を持ち家にしたのは、10年前のこと。

青木なみ46歳。写真を撮ることで生計を立てて来た、フリーランスのフォトグラファーだ。

「おはようございます。」

住居人達が出したゴミ袋を、ゴミ置き場から運び出している管理人に、ある朝声をかけた。

管理人は初老の男で、滝川といった。

管理人室の扉に、滝川の名前が貼られたのは、ちょうど1年前だった。

マンションの管理人は、気付けば数回、変わっていた。

「いつもゴミ置き場、綺麗にして頂いて、ありがとうございます。」

そんな、なみの言葉に無口な滝川は、ただ小さく会釈するだけだった。

幹線道路脇に建つそのマンションは、周りにあまり高い建物が無いせいか、空が大きく見えていた。

東側のベランダからの眺めが好きななみは、何となく無しに眺めるうちに、四季を通じて登る太陽の位置が、大きく変化していることに気が付いた。

冬の季節には、南よりの神社の上から太陽が登り、やがて暖くなるにつれてそれは、北寄りの小学校の屋上から登るようになった。

そして10年も暮らすようになるとその位置を、やけに正確に把握出来るようになっていた。

仕事場にしてしている部屋の窓は西側にあり、幹線道路に面しているせいか、その窓は開かずの窓になっていて、アルミ製のクロス面格子が、外側の窓を覆っていた。

窓際に置かれたデスクの上には、写真のデータを扱うパソコンが、窓を背にして置かれていた。

西側に黄色い色を置くと金運があがるという風水ももれなく取り入れ、仕事場の窓には黄色い紙を貼り、西日を遮光した。

開かずの窓に西日が差すと、遮光したはずの紙が薄いせいか、通路を歩く人影が、右から左へ左から右へと、移動して行くのが見えた。

天気の良い夕刻には、紙を透けた僅かな西日で、部屋の中がほんのり杏色になることもあった。

カメラバックを下げ帰宅したなみが、マンションの入り口まで来ると、植栽を剪定している滝川を見つけた。

「滝川さん、お疲れさまです。」

木バサミを動かす手が止まり、なみに目をやると滝川は、静かに頭を下げた。

「剪定まで、なさるんですか？」

ゆっくりと木バサミは、動き続けていた。

その場を立ち去ろうとしたなみに、滝川が言った。

「カメラマン、なんですか？」

「はい。写真を撮る仕事をしています。」

「長いん、ですか？」

「フリーになって、15年くらいです。」

「私もむかしは、写真を撮っていたんですよ。」

「えっ」

「風景の写真ばかりを、撮っていました。」

「どんな風景ですか？」

「山です。山岳写真です。私の時代のカメラは、フィルムでした。モノクロフィルムで、山を撮っていました。もうだいぶ前に、身体を悪くして、辞めましたけど。」

滝川の目はどこか遠くて、懐かしい山に想いを馳せながら、話しているようにも見えた。

「あなたは、何を撮っているのですか？」

「私は、映画のポスターとかを、撮っています。」

「人を撮るのが、好きですか？」

「好きですね。」

「私は、人が、苦手なんです。」

そう言うと木バサミを持ち替え、滝川はゆっくりと、その場から去って行った。

マンションのゴミ置き場の、可燃、不燃、ペットボトル、ビン、缶などの仕分けが驚くほど整頓され、また清潔になったのは、滝川が管理人になってからの、この1年かもしれないと、なみは思った。

入り口脇の植栽と滝川の木バサミを想いながら、いつもの場所に機材を戻すと、仕事先のグラフィックデザイナーに、以前言われたことを思い出した。

「カメラバックの中の機材が、きちんとしているカメラマンの人って好きなんだよね。仕事出来るでしょ、そういう人。」

その言葉に、乱雑になったカメラバックの中身をいつも整理していたなみだが、きっと滝川のカメラバックは、きちんと機材が整理されていただろうと、想像したのだった。

ある日の夕方、帰宅したマンションのポストに、映画の宣伝会社から送られて来た茶封筒が入っていた。

中を開けると、公開間近の映画のチラシが、数枚入っていた。

それはなみが撮った写真が使われたチラシで、主演俳優の二人の顔がアップで、レンズを凝視している写真だった。

その時、管理人室から出てきた滝川とすれ違くと、

「あ、滝川さん、映画のチラシです。」

そう言いながら、なみがチラシを1枚手渡した。

「あなたの写真ですか？」

「はい、去年の映画の現場で、撮った写真です。」

「あなたの名前は、何ですか？」

「あ、青木です。」

少しだけ頷くと、チラシを手に頭を下げる滝川だった。

帰宅するといつものようにパソコンの前に座り、カメラの中から撮影済みのカードを取り出し、カードリーダーに差し込みながら、パソコンの立ち上がるのを待っていた。

パソコンの脇の壁に、さっき届いた映画のチラシを1枚貼ると、それをじっと眺めていた。

すると、パソコンの裏の黄色い窓に、西日を受けた人影が左から右へと、動いて行くのが見えた。

するとすぐまた右から左へと戻って来たその影は、ゆっくりと窓の前で止まると、今度は小さな影が、上へ下へと動き始めた。

クロスに貼られた面格子を、這うようにして動く影。

それは、ゆっくりと何度も何度も丁寧に、格子を拭くようにして動いていた。

「滝川さん。」

一日の終わりに、管理人の滝川がした仕事。

それは、人が苦手な滝川からなみへの、言葉に代えての、ありがとうだった。

夕刻の時、杏色の仕事部屋が、温かかった。